

聖地巡礼——リシケーシ



東方研究会専任研究員
清水晶子

五、六月のデリーは、酷暑期の名が示す通り、想像を絶する暑さとなる。連日、気温は摂氏四〇度を軽く超え、日常生活にもかなりの困難を感ずるようになる。頭の上からばかりでなく、地面から照り返す強烈な日差しにも、目を開けているのが痛くなる。人々は、日中屋内で暑さに耐え、極力外出を避ける。天井扇風機を四六時中つけっぱなしにしても、熱い空気をかきまわすだけで、涼しくなるわけではない。夜も寝苦しく、寝る前に、石の床に水をまいて、部屋

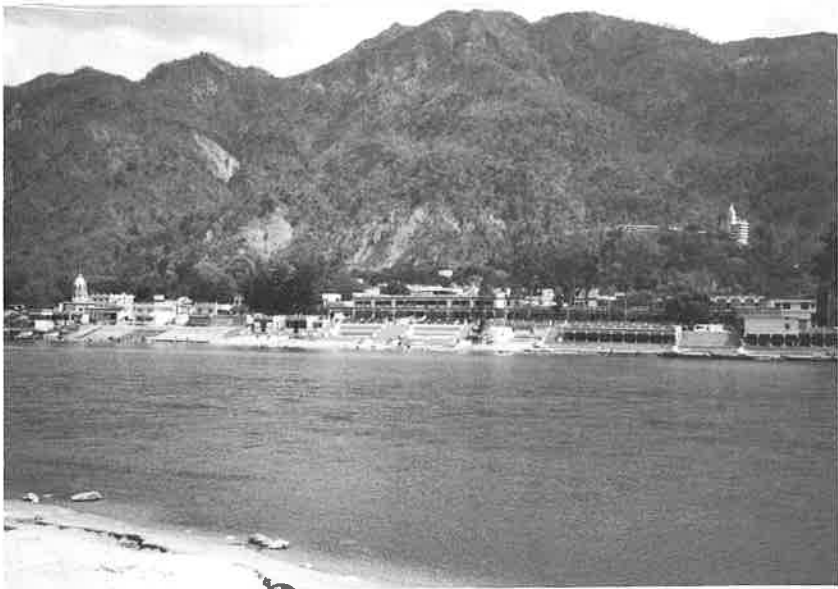
の熱を少しでもさましてからでないと寝つけなかった。

学生たちは、この時期、学年末のテストが終わって、すでに帰省している。留学生も、避暑や帰国のため、デリーを離れる。にぎやかだった寮も、居残る学生は数えるほどになる。あちらこちらと、避暑地を物色していたが、五月末、我慢も限界に達し、夏休みは指導教授のご好意で、知人のシャルマさんを紹介していただき、二カ月間リシケーシで過ごすことにした。

リシケーシは、デリーの北東約二五〇キロ、聖なる河ガンジスの上流にあり、デリーからは、バスで六―七時間の道のりである。容赦なく照りつける太陽の熱にさらされてのバスの旅は、目的地にたどり着くまですっかり体力を消耗した。あまりの暑さに、道中、ジュースばかり飲んでいたら、隣の席のシク教徒の老夫婦から、お弁当のいがりのカレーとチャパティ（インドの薄焼きパン）をいただき、リシケーシに着くまで、一人旅の私をいろいろ気づかってくれた。

リシケーシは、ヨーガの聖地として有名な所であり、小高い山が迫るガンジス河の両岸には、アシュラム（道場）と石段のガート（沐浴場）がいくつも並んでいる。巡礼者たちはアシュラムに滞在し、聖河で沐浴し、罪障を浄め、祈りの日々を過ごす。三月に訪れた時、エメラルド色だったガンジスは、ヒマラヤ山脈の雪解けと

ガンジス河とアシュラム





リシケーシのサードウ

共に、水かさが増して、泥水のように濁り、勢いよく流れていた。リシケーシは、サードウ（行者）の町でもある。その数は、巡礼にやってくる人々をはるかに上まわっているように見えた。鮮やかなサフラン色の衣を身にまとい、杖とカマンダルと呼ばれる手さげの鉢と毛布を携えたサードウたちが、聖地の雑踏を行き交う。リ

シ（聖仙）を思わせるような、長く伸ばした髪を見事に結び上げ、腰布だけをつけ、灰で全身を覆っているサードウたちにも、出会うことがあった。彼らは、人里から離れた庵に住んでいる。リシケーシから、さらにガンジス河をさかのぼった奥地には、生涯森林にこもって修行している行者が大勢いると聞いた。

リシケーシは聖地なので、肉食・アルコールは禁止されている。バザール（市場）では、卵は売られていたが、どこへ行ってもレストランでは、菜食の料理のほかは食べることができない。あまたのサードウたちを支えているのは、インド全土からの篤志家の寄進による食事のサービスである。リシケーシは、ヒマラヤに点在するそれぞれの聖地巡礼の旅への出発点でもあり、巡礼者とサードウのかもし出す、どこことなく神聖な雰囲気漂う町であった。

リシケーシは、いにしえより聖者の集まる所

と言われている。現世での一切の欲望を捨て、サードウとなって修行する人々や、ガンジス河への熱い思いを抱いてやってくる巡礼者の群を日々目のあたりにしていると、その聖なるヴァイブレーションがいつしか私にも伝わってきて、神々との出会いや恩寵を求めて巡礼する人々の気持ち、肌で感じられるように思えた。

シャルマさん一家と、優れたヨーガの指導で名高いシヴァナンダ・アシラムを訪ねたり、ガンジス河への献花のプージャー（祭礼）をしたり、新たな楽しい体験をし、一カ月の間、ゆったりとした休暇を送った。この地で体調を整えたあと、以前から予定していた、ヒマラヤの聖地にあるケダールナート寺院とバドリナート寺院に参拝する巡礼のツアーに参加することにした。六月下旬、ウツタル・プラデーシュ州主催のツアーバスに揺られて、聖地へ向けて旅立った。

ガンジス河岸

